

市社福センターは市立？

市議会12月定例会・一般質問で、私は「社会福祉の拠点施設について」質問しました。鈴鹿市の社会福祉行政を担当するのは健康福祉部・社会福祉事務所ですが、官民の福祉事業、福祉団体、ボランティアなど幅広い分野を統括する仕事は「鈴鹿市社会福祉協議会」（社協）が担っています。社協の事務局は、中央道路沿いに建っている「鈴鹿市社会福祉センター」内に入っています。このセンターは1977（昭和52）年に建設され、築39年と古く手狭になっています。加えて社協や福祉関係の仕事が量質ともに格段に増えていることから、時代のニーズに合った規模へ拡大し、社会福祉の拠点施設としての役割を果たすことが求められています。 社会福祉センターの建物（神戸地子町）



鈴鹿市の公共施設としての計画に入っていない

ところがこのセンターは、市が建設したはずなのに「市社協」の所有になっていて、そのために市の公共施設のリストから外れているのです。これからの市の公共施設の配置や管理のあり方の基本を定めた「公共施設マネジメント」（2015年）にも記載されていません。鈴鹿市には「社会福祉センター」は無い、という扱いになっているのです。したがって今後このセンターを改築するとか複合施設にするとか、どうしようか検討する対象にもならないということです。これでは、先の見通しが全くありません。

近隣市を見ても、社協は市が建てた公共施設の中に入っているのがほとんどで、鈴鹿市がおかしいのです。私は「重要な施設なのに市の施設でないとの扱いは、大きな矛盾。はっきりと鈴鹿市の公共施設であるとの位置づけを明文化すること」を求めました。

リニア計画、見切り発車から暴走へ

12月議会・一般質問で、リニア新幹線計画について取り上げました。4年前にも質問しましたが、その時はまだ三重県には30年以上先の遠い話のような議論でした。しかしその後、事態は大きく進んできています。リニア計画は「JR東海が行なう民間プロジェクト」から、国が3兆円もの財政投融資をする「国家プロジェクト」になった、東京―名古屋間で工事が着工され、名古屋―大阪間も前倒しで連続して進める計画になった、三重県も新年度予算にリニア関連の計上を表明した、など大きな変更が、国会での論議もほとんどなく、あっという間に通ってしまいました。

9兆円とされる事業費が、全額JR東海の負担から、国の3兆円融資となったことで、今後事業費がいくら膨れ上がっても国が追加する＝税金を注ぎ込める仕組みになりました。しかし、全線の80%ものトンネルを掘る工事が出る膨大な量の土の処理、環境破壊、地震などの災害対応、電磁波などの問題点は、まったく未解決のままです。

それなのに予定ルート沿線の自治体は、「リニアが通ればバラ色」という神話に乗せられて、推進の姿勢を変えていません。三重県・鈴鹿市も同じく、全市町が推進の「期成同盟会」に入っています。私は今の時点で「本当にリニアが必要なのか」を再検討することを求めました。

秋の後援会旅行、杉原記念館など訪ねました

11月20日、鈴鹿市共産党後援会恒例の「秋のバス旅行」で、愛知県旧小原村の「四季桜と紅葉」、岐阜県八百津町の「杉原千畝記念館」を訪ねました。すばらしい秋空の下、紅葉した木々をながめてゆったりしました。

杉原記念館では、ナチスの迫害から多くのユダヤ人を助けた外交官・杉原千畝について、館長の説明や展示で深く知ることが出来ました。あの戦争に明け暮れた時代に、杉原のような日本人がいたこと、杉原だけでなく、敦賀・横浜・神戸でもユダヤ難民を温かく迎えた人々がいたことに、救われる思いがします。



記念館前の杉原千畝の銅像

「カジノ」解禁で、日本が良くなるはずがない

12月15日、国会で「カジノ解禁推進法案」が強行採決されました。世論調査でも反対が多数という悪法を、まともな議論もなしに、なぜ国会会期を延長してまで通す必要があったのでしょうか？

ギャンブル依存症は、人間的な生活をこわす

私が20年近く何かと相談に乗ってきたSさんは、いま思うとギャンブル依存症でした。生活保護基準ぎりぎりの年金で暮らしていて大変なので、アルバイトなど仕事を紹介してあげたりしました。ところがSさんは時々、出たばかりの年金を使ってしまい、泣きついてくることがありました。問い詰めると、パチンコや競輪に注ぎ込んだようでした。「パチンコするなどは言わないけど、お金を5千円とか決めてすれば」と注意すると、その時はハイと言うのですが、ほとぼりが冷めるとまた同じ失敗をするのです。「分かっているけど、頭の中がワーっとなって、気がつくとき金が無くなってる」と言っていました。連絡もとぎれて、2年ほど前に孤独死で発見されました。

Kさんも一人暮らしで、年とともに介護が必要な状態になってきました。厚生年金もあるので、私が施設入所を進めましたが、ウンと言いません。事情をさぐると、どうも入所すると競輪に行けなくなるから、というのが本当の理由だと分かりました。ある日、路上で倒れていて病院に運ばれ、脳梗塞で寝たきりとなり、今年施設で亡くなりました。

SさんもKさんも、根はまじめな人でしたが、ギャンブルが人生をこわしたのです。こんな人をさらに生み出す、ギャンブルの民間への解禁など、とんでもないことです。まして「成長戦略」などと、よくも言えたものです。

2017年を、希望が見える明るい年に

2016年もあと少しで終わろうとしています。皆様には今年もたいへんお世話になりました。7月の参議院選挙での共産党と野党共闘の前進は、大変うれしいことでしたが、アベ暴走政治をストップさせるにはまだ不十分、一層の力が必要です。2017年は衆議院選挙も予想され、庶民の暮らしを守るたかひの正念場となります。引き続きのご支援をよろしく願います。

ずいそう



今年話題になったアニメ

今年の映画では、アニメの2作品「君の名は」と「この世界の片隅で」が評判である。最近のアニメは、いわゆる「マンガ」から大きく発展して、風景や人物を現実よりもリアルに描いている。実写の映画でも、どこまで実写でどこからがCGか分からなくなっているような時代、かえって細部までていねいに書き込まれたアニメの方が本物に見えてくる。

「君の名は」で描かれている風景は、東京の街並み、飛騨の自然、電車の車内や雑貨屋の店内、風の吹き方や陽当たりと影などなど、どのシーンも隅まで本当にきれいで、何よりそのことに感動した。物語は、東京の男子高校生と田舎町の女子高校生がある日突然、入れ替わって不思議な体験をするという、このごろよくある設定だが、それほど違和感がないのは、今どきの高校生の生活と思考を等身大に表現しているからか。また彼らが巻き込まれる大災難も、3.11以後の今の私たちにとっては作り話とは思えない、こんなこともあり得るのでは、と思える臨場感があった。

毎日の普通の暮らしにだんだん忍び寄る戦争の影

「この世界の片隅で」の物語は、戦争末期の呉市と広島市を舞台に、18歳の娘・すずが嫁にいき、一家を支える主婦となって暮らす毎日を、淡々と描いている。ご飯を炊き洗濯をし、畑で野菜を作る生活が、だんだんと戦争という大波に呑み込まれていく。軍港・呉の町が空襲で焼け野原になり、そして広島が原爆で壊滅するなか、それでも必死に暮らしを守ろうとがんばる主婦・すず。「はだしのゲン」のように、戦争反対を叫び、責任者を告発するシーンなど何も無いが、あの戦争の時代に生きた庶民の姿が、細部までリアルに描かれている。

変わらないような毎日の暮らしに、少しずつ不自由なことが入り込んできて、いつの間にか取り返しのつかない事態に……。このアニメは、平和憲法の下で70年過ごしてきた現代の日本人への、「危ないぞ、止めるなら今だ」との警告ではないかとも思える。憲法改定できる勢力が国会で多数となり、自衛隊が武器を持って海外に行けるようになった日本、これでいいのか？おかしいぞ！の声をいまこそ草の根から上げていこう。